

## ナイトセミナー

### 経絡機能障害

関西鍼灸大学神経病研究センター

谷 万喜子

経絡（けいらく）は、東洋医学で生命活動のエネルギーであると考えられている「気」や「血（けつ）」を身体各部に運搬する経路とされている。すなわち、経絡の機能障害が起こると気や血を円滑に運ぶことができず、人体に様々な症状を呈しうる。経絡機能障害の代表的な症状として、気滞（きたい）が挙げられる。これは、身体のある局所、あるいは臓腑、経絡の気機（きき：気の働き）が阻滞して気の運行が滞ることによって生じる、臓腑、経絡の機能障害を表す症候である。原因は、外邪（がいじゃ）感受、ストレス、飲食の不節制、外傷などである。気滞を起こしている部位のちがいで種々の症状を呈するが、共通するのは、遊走性の疼痛である。さらに、気血不足、精気消耗により、臓腑、経絡がうまく養われない場合にも臓腑、経絡に機能障害をもたらすとされる。

経絡の機能障害をもたらす気滞を生じる要因のうち、外邪とは「風（ふう）・寒（かん）・暑（しょ）・湿（しつ）・燥（そう）・火（か）」という6つの自然の気候すなわち六気（ろっき）が、過剰になったり、通常の状態であっても人体が過剰に反応したりして人体に害をおよぼすときに、六淫（ろくいん）と呼ばれる外邪となるものである。疼痛に大きく関与する風邪・寒邪・湿邪の性質と痛みの特徴は、次のようである。

①風邪：上昇し、外に向かう性質をもつ。風邪に冒されると汗、悪寒、筋肉痛が生じる。主として春に現れるが、どんな季節にも起こり得るもので、寒や湿など他の邪と結びつくこともある。身体はどこにでも侵入することができ、痛みがあちこちに移動する。

②寒邪：凝集し閉鎖する性質があり、気血の運行を阻害し疼痛を引き起こす。寒邪に冒されると、気滞、血（おけつ：血の循環不全）を起こしやすい。急激な痛みが発生し、冷えると増悪、暖めると軽減する。

③湿邪：重く濁っているもので下に向かう性質がある。湿邪に冒されると、身体が沈んだように重く、鈍痛のような不快感がへばりついたような感じとなる。固定性の痛みで重だるさを伴う。腫脹を生じ、長引いてすっきり治らない。外邪としての湿（外湿）は、梅雨、湿気の強い環境、住居などによってもたらされる。

また、ストレスから気滞を生じる場合には「七情（しちじょう）」と呼ばれる「怒・喜・悲・思・憂・驚・恐」の7つの感情の動きに着目する。通常感情変化では病因とはならないが、七情の変化が過度であるとあらゆる症状を引き起こすとされている。

飲食の不摂生や、過度の安静なども気滞を引き起こす。飲食の不摂生では食べ過ぎや偏食、過度の飲酒などが問題となる。特に生もの、冷たいもの、甘いもの、油っこいものの過食は身体の内側から湿（内湿）を発生させる要因として注意が必要である。

今回のナイトセミナーでは、経絡の機能障害を引き起こす以上のような要因を把握し、治療における対応を考察していきたい。